

# 2017 ASIAN ROWING CHAMPIONSHIP

PATTAYA, THAILAND

4 TO 8 SEPTEMBER, 2017

審判参加レポート

徳島県ボート協会 栗山俊久

2017年9月4日～8日に実施された表件のアジア漕艇選手権大会に審判員として参加した。項目ごとに気づいた点等を下記にまとめました。なお、今回は、通常の手順通り実施された審判業務についてはひとつひとつ列挙せず、またレポートも地域の説明などは極力省き、また日付順や自分の配置順通りに記載するのではなく、今後の国際審判業務に役立つものを項目ごとにとりまとめました。

## 記

### 1. 運営関係

#### (1) 審判の派遣に関する連絡体制

日ボからのノミネートを受け FISA より私の名前が審判員として公表され、即座に審判長と競漕委員会にはメールしたが、何の返信や知らせもなく、日ボから連絡いただいたレーススケジュール以外に詳細が全くわからなかった。何回かメールでコンタクトを試みたが一向に返事がないため、審判員の集合日や最初のミーティングの日もわからず、飛行機の値段も時間につれて上がっていつってしまうため、とりあえずバンコクまでの飛行機と市内のホテルをおさえて連絡を待った。結局、審判長からは何の連絡もなく、地元競漕委員会から連絡があったのも試合の10日前であった。

#### (2) 会場の所在地

会場はパタヤとなっているが、実際はパタヤ市の隣のジョムティエン市からさらに奥地の湖。バンコク空港からパタヤまで車で2時間、そこから宿舎となるホテルがあるジョムティエンまで30分、さらにレガッタコースまで1時間と、空港から計3時間半、首都バンコクからは4時間半という遠隔地であった。移動手段は車のみ。

#### (3) コースの長さ

アジア大会は2000mで実施される。しかし試合前日もまだコース造成工事が完了しておらず、2000mにおよそ100m不足していた。そこで少しでも距離を延ばすためフィニッシュの位置をずらして広げることも試みたが、まだ22m足りず、結局1978mの試合となった。

#### (4) コースブイ

2000mのコースにある100mごと20個のブイについてタイ国ボート協会が考えた

のは、今回不足の 22m を 20 個で割った 1.1m を各 100m から引き、ブイを 98.9m ごとに設置し、全体が 2000m あるかのようにしようとしていた。結局審判長と競漕委員会が話した結果、最初の 100m を 78m として、残りの 1900m には通常どおり 100m 間隔のブイを入れることとなった。

(5) 船台

中が空洞の複数を接続できるポリタンクのようなものをいくつもつなげて船台を作っていた。これならばコストもかからず、簡単に取り付け、取り外しができるので、恒久施設ではない場所でレースをする際に日本でも利用できると感じた。



船台



船台は上記ピンクのポリタンク状のものをつなぎ合わせたもの。

## 2. 審判業務

### (1) 発艇

上述の通り発艇についてはいまだに掘削作業中のため、発艇台はなく、掘削途中崖の上に雨よけのテントをはってそこから実施した。ただ仮設とはいえ線審、判定とはシステムで連動されシグナルスタートできる設備であった。



### (2) 線審

直接、線審をする機会がなかったが配置された審判によればスリットの線もびんと張ったものでなく張りなおしたとのこと。また崖の上の特設のテントによる線審位置のため、ラインもその位置が正しいと信じざるを得なかったという。



画面右手が発艇のテント、左手画面奥のテントが線審。

(3) 主審

ドライバーの操縦技術は高く、特に支障はなかったが、これまでタナー、渡辺醇さん、ニコラスと、常に審判艇の位置について指導されてきたが、今回の試合はどの審判も審判艇を競漕から相当離れた場所に位置させており、上り数を考えた主審艇の位置とは言えず残念であった。

(4) 判定

判定位置が急遽、本来の判定台ではなく、上述で記載した通り、発艇位置の掘削が終わっていないことから発生するコース距離の不足を補うため位置を奥に 100m 近くずらしたため、完成したばかりの判定塔は使用できず、判定塔から奥にテントをはって即席の判定部署を作った。初日が判定であり、設置確認を行ったが、カメラが判定員の階段の正面にあるために判定員がスリットを目視できない状態であったこと、スリットがびんと張っていないこと、そもそもスリットの位置が正確な場所かどうかもわからないことなどがあり、それぞれ指摘して修正させた。香港からシステム担当の業者が来ていたが、いくつかの試合でレース番号が間違っていたり、あきらかに着順を間違えているケースもあり、それぞれ修正させた。



スリット上に鎮座するカメラ。

(5) 監視

コントロールコミッション（監視）の担当者についても、朝、同じ時間にバスでホテルを出発するため、国際審判が到着するまえに岸を蹴るクルーについては国内審

判にまかせっきりであるという状態であった。また、会場に到着し、朝の審判ミーティングが始まるまでその日の配置がわからないので、国際審判が現地についても配置につくのはさらに遅れることとなっているが、審判長も他の審判もあまり気にかけていないようで不思議であった。午前中にパラ・ローイングの試合が組み込まれている日もあり、国内審判員はパラ・ローイングの選手のチェック項目がわからず、たまたま出発桟橋にいたパラ・ローイング委員会の方々がチェックしてくれ、審判が競漕委員会（パラ）の方から引継報告を受けて監視業務を開始するという奇妙な場面もあった。

チームマネジャー会議で審判長から監視にて徹底する旨、伝達されていたものを、特に意識して監視を行った。

①靴下、スカーフについても帽子と同じルールを厳格に適用する。

同じ形、色であればメーカーについては違ってよいということで、同じ形、長さ、色の靴下であればナイキでもポロでもよいというものである。特に問題があるクルーはなかった。（はだしでもよいかという質問があったが、靴下をはく選手同士がそろっていればよいという説明をした。）

②ヒールロープはストレッチャーの靴が水平できちんと止まる長さ

インドネシアのフォアの 2 番にヒールロープがなく注意したところ、コーチ(オランダ人)から艇を損傷したカザフスタンに貸したためにこの艇しかない。この艇で出させるようにと執拗に喰い下がられたが、状況は理解するしカザフスタンに艇を貸したことには大会の運営上感謝するが、選手の安全には代えられないと拒否した。結局、クウォドのリガーをはずしてフォアに代えて出場した。状況を配慮してレース時間の検討の具申も考慮したが、結局レースに間に合ったため何もしなかった。

③シートチェンジは事前に申請のないものは認めない

インドネシアの男子クウォドのシート順が、監視のもっているリストと違っていた。指摘したところコーチや監督から、レールの長さが合わないためシートの変更が必要であり申請済であると強弁され、まさに岸を蹴ろうとまでしていたが、無理やり出艇を中止させたところ、審判長にも許可をとっている、責任をとれるのかまで言い始めたため、彼らの目の前で無線で審判長に連絡したところ、スタート・リストに間違いはないという返答が明確にあり、もとのシートにもどさせた。（結果、このクルーは優勝した。） 優勝したこともあり、あとで謝罪には来たが、こうした平気でうそを言うクルーがいることにはがっかりした。

## (6) 審判長

一審判員の分際で審判長を云々するのはおこがましいが、かつては各審判員に無線が渡されていなかったため、審判員がきちんとその場で判断できる事前のお膳立てがなされ、また審判員そのものも技量がある審判がそれなりのポジションにつくようになっていたが、無線の全員配布によるせいか、経験のあるなしにかかわらず審判部署



割りは平等にローテーションされるようになり、また審判長自身も各ポジションを回ることもなくなり、判定小屋にいらびたってひたすら **result sheet** にサインするだけになってしまっているのはいかななものかと感じた。このため、特にレースや各審判業務を審判長が直接見ていないため、主審のところにも記載したが主審艇のポジションについても言及されることもなかった。今回厳格だったのは監視関係であったが、審判長が監視に来ることもなかった。そんな中で発艇が審判長の許可もなくユニフォームが統一されていないクルーをイエローカードにて発艇させ事後報告するというケースもあり、ちぐはぐさを感じる場面もあった。

## 所感

コースの距離が足りないままレースが催行されるというところ自体にもともと大きな問題を抱えた大会であった。かつてのように自分の審判技量を高めるために国際試合に参加するという点については、今大会についてはあまり感じられず、むしろかえって日本の競漕委員会、審判団の技量の高さを感じさせられた大会であった。以前のタナー、渡辺醇両氏がアジアの審判長として長年培ってきた技術や精神が全く受け継がれず、むしろ失われているという感は否めなかった。日本の国際審判にとっては、費用の面や日程が長期に及ぶことなど問題はあるかもしれないが、本場欧州での審判に参加したほうが日本の技術水準を高めることになるのではと考えると同時に、アジアの水準を高めるためには逆にもっと日本がかかわらなくてはならないと強く感じた。

以上